研究

国木田独歩が佐伯から去ったわけ

「佐伯と国木田独歩」補遺

賛助会員　山内武麒

国木田独歩が、佐伯の鶴谷学館の教師として着任したのは、明治二十六年九月三十日で、翌七年の八月一日に、職を辞し佐伯を去って上京している。この間、佐伯に居住したのはわずか十か月である。佐伯の自然と風物に魅せられ、昼となく夜となく山野を散策して、おのれの詩嚢をいやが上にも肥やした独歩が、どうしてかように早々にして佐伯から去ってしまったのであろうか。

独歩が佐伯に来て間もないころ、東京の友人たちに送った書簡の中に、「佐伯は、山水の風景に富み、山あり、河あり、海あり、郊外の散歩に至極よろしい。その上魚が多く、毎日さしみのごちそうがあって、滋養の点には心配がない。生活しやすいところで不平がない。」としるしてある。佐伯に対する彼の第一印象はすこぶるよかったらしい。その上、経済的にも恵まれた。佐伯に来る前の彼は、東京で失職し、国元の父からの送金も断えてしまって、全く生活の安定を失ってしまっていた。文学を愛し、詩を求め、人生の探究に若い情熱を傾けていた彼も、どうしようもないところであった。ちょうどその時、救いの神が現われたように、徳富蘇峰から矢野龍渓に紹介されて、矢野が郷里佐伯の鶴谷学館の教師の口が与えられ、赴任してきたのである。独歩が年二十三才の時である。しかもその時、この若い独歩の俸給は月額二十五円であって、当時の佐伯では、裁判所の判事と同額の高給取りであったというのだから、生活の安定を得て恵まれた。それで弟の収二を呼び寄せて一しょに生活し、国元にも送金した。僻遠の田舎であるからもの足りないこともあったろうが、自然の恩恵に浴し、経済的にも恵まれたこの佐伯に、不平があったわけはない。

それが、どんな理由で、佐伯から早々にして立ち去ってしまったのであろう。

独歩という人物は、どんな人であったのだろう。風彩はどちらかというと、小柄の方であまり揚がらず、いつも黒の紋付きに木綿ばかま、それに編上靴をはいて、ちょこちょこと歩いていたという。

独歩が勤務した鶴谷学館という学校は、明治二十三年、佐伯の旧藩主毛利子爵の肝いりで、新屋敷の民家を借って創設されたもので、小学校を卒業したものに、中等教育をすすめ、夜学を中心として、学課の程度も中学上級であったらしい。独歩が佐伯に来て間もなく、友人に出した手紙の中に、

生徒の気風は未だ十分知れず候へ共、一寸見たる処にては、昂々然たる大志ある者も見受けず、生徒中長年者の大半は職業を育し、或は裁判所に出るとか、或は銀行に出るとかにて、紙然たる学生は少数に御座候。授業は午後三時半より始めて五時半までと、午後八時半より始めて十時半までとの四時間に候。講義はナショナル・スチントン万国史、ヘスチング伝、其他文典、読方、別に代数学を受け持ち、一週間二十三時許りの労働に御座候。

と、ある。また『欺かざるの記』の二十六年十月五日の

条を見ると、

雨降ること蕭々たり。

昨日より始めて授業す。三時半（午後）より下級生の為にナショナル読本二の巻を授く。四時半より リーディングを授く。午後八時半より代数学を授く。九時半より上級生の為めにスキントン万国史を講ず。以て日課を了はる。

と ある。

これを見ると、鶴谷学館は、午後三時半から五時まで、八時半から十時半までの、二部授業をしていたことがわかる。なお代数学はチャーレー・スミスの訳書を用い、万国史は原書を使用していたという。

課目は、英語・数学・漢学・理科・剣道であって、独歩在任の間は、独歩が英語と数学を担当し、漢文と剣道は中島羆一郎氏、理科は石田豊城氏が担当していた。

（註）中島羆一郎は当時、時習学校と称する漢学私塾を開いていた。石田豊城は、当時の南海部郡高等小学校長であった。この二人は兼任であった。

この鶴谷学館における独歩の教授ぶりは、熱心であったが厳しい方で、生徒を鍛いあげていた。習ったところを知らないと言ったら大変なもので、そんなはずはないと、目をむき出して叱ったものだ。

それについてこんな話がある。ある日、中谷某という生徒が指名されて、「分りません」というと、「そんなはずはない。やって見よ」と聞かない。「全部分らないのか」と聞くと、「そうです」と答えた。先生大いにしかると、中谷は憤然と立ち上がり、「もう習いません」と席をけって、すたすたと帰ってしまったということである。

独歩の気性は、聞かぬ方で負けずきらいであったから、生徒の方からぶっつかって来ないと気に入らない。ところが生徒の方にその気概が乏しく、いつも先生の方から突きこまれるという風で、手ごたえが少なかった。独歩は、生徒を激励する考えであったろうが、常に佐伯の青少年の無気力さをけなしていた。当時独歩は、年齢わずか二十三才であったから、生徒の中には彼よりも年長者が幾人かいた。「若僧のくせに生意気な」と、生徒からの反感を買っていた。

独歩は非常な勉強家で、暇さえあれば本を読んでいたが、生徒が訪問してくると、いつでも書架から書物を抜きとって、「僕は、昨夜ここからここまで読んだ。ちょうど〇〇ページある」というのが常であった。これも生徒を励ますつもりであったろうが、いかにも自分が勉強家であることを誇示するかのような驕慢な態度に見えて、これもまた、彼に対して反感を呼ぶ、一つの原因でもあった。

徳富蘇峰の独歩評にも、彼は議論好きで、傍若無人なところがあり、先輩の眼から見ると「こましゃくれた生意気な青年」に見えた、とある。

また、この反感を買った今一つの大きな理由として、彼が熱心なクリスチャンであったことがあげられる。その当時、佐伯にはまだ教会はなく、民家を借りて地方の宣教師が出張して、布教伝道する程度で、信者も少なかった。独歩は進んでこの仮教会に出席し、自らしばしば感話した。耶蘇教をまだ異端邪教と見る人の多かった佐伯では、学校の教師が耶蘇信者かと、白眼視されていたのである。

独歩が、排斥を食った直接の原因は、明治二十七年の二月九日の夜、佐伯の青少年たちの集会である、（註）益友会の会合に出席して、一場の演説をした。この演説が直接

の原因であった。

（註）益友会は、明治三十二年九月に創設された佐賀・南郡の青少年の会合で、学問を研究して知識を交換し合い、互いに徳行を励まして友誼を厚くすることを目的としていた。隔週毎に集会を催して討論会を開いたり、先進者を招いて、演説や講義を聴講していた。またこの会は「益友」という雑誌を発行して、論説・文苑・推歌・小説などを載せ、会員相互の発表機関としていた。会員は鶴谷学館の生徒の外、広く一般青少年有志誰でも参加できるものであった。

この演説の内容は、まじめな人生論であったが、その話の中に、矢野龍渓に対する非難めいた批評をさしはさんだ。独歩としては、正当な評価のつもりであったろうが、例の調子で放言してしまったのである。これを聞いた聴衆は、大恩ある郷土の大先輩さののしったというので激昂し、彼は会場から追い出されてしまった。

その晩、独歩への辞職勧告書が、彼が下宿していた坂本氏邸の庭先に置かれた。実は、坂本の家の玄関前の松の木の枝に、独歩が窓をあけるとすぐ目につくようにつるしたのであるが、それが朝になって庭に落ちたものらしい。このことを、独歩は『欺かざるの記』に次のようにしるしている。

二月十日

今朝、窓を排して下瞰すれば、庭先きに一書状の落ちたるを発見す。披き見れば何者とも知れず、吾に向て一片の勧告書を送りたる也。其の文は次の如し。

別段書き置かざるべし。只だ其の意は、

第一、先生来伯の時、自分の為八分、学生のため二分を務むと言ひしは薄情ならずや。第二、偏愛あり。第三、勉強家を益々庇護し、不勉強家を遠くるは、給金を受けつつある義務にそむかざるか。第四、昨日、矢野先生を冠慨なしと罵りたる所以は如何！！！等なり。

記名は山本修吉とあり。

今朝、富永氏を訪ひ、山本修吉なるものを知らずやと問ひしに知らずと答へぬ。則ち此の勧告書の事を語りたるに、吾が推測にたがはず、学館生徒の或者の行為ならんと云へば、石丸の如きならんと云う。たれならんと言へば石丸の如きならんと云う。吾も亦堅く左様に信じ則ち今夜彼を呼び大いに之きなじる。彼堅く自ら知らずと云う。すなはち、吾が思ふ所、吾が志ざす所、信ずる所を告げ、互に誤解なからんことこそ望ましけれと語る。彼も亦た承知したり。其仏大に道を語る。

独歩が、この勧告書に大きな衝撃をうけ、憤激したことがこの文でわかる。しかし独歩は、これに抗して、次週の益友会の集会に再び出席して、幹事の藤田連次郎にもう一度演説させろと要求した。そのため会場は、また沸騰し、結局、彼は登壇出来ず、ぷんぷん怒って帰ってしまった。

このことを二月十七日の記には、

今夜の衝突は吾に甚だ大なる事を教へぬ。曰く、決して自ら他人の前にて誇る勿れ。否な、かかる常套の語に非ず。曰く、決して自らを人間の前にて判断する勿れ、神の前に断ぜよ。人間の他の者と比較して自ら高くする勿れ、神の前に心地して、常に神の前に謙遜なれ。

と、ある。だいぶん反省して、この晩は、先輩の演説について釈明する考えであったのであろうが、演説がゆるされず、怒って出てしまったのである。

この排斥運動に対して、独歩自身は、やましいことはないと思っていたらしいが、実際は、彼の人となりと、キリスト教信仰など、彼に対する日ごろからの反感が、たまたま矢野龍渓を攻撃した演説に、火をつけられて爆発したものと、見るべきであろう。

この事件は、彼を相当動揺させ、教師としての自信を失わせたらしく、このころから佐伯には、永くいない考えを深めたものと思われる。

独歩が、鶴谷学館と結んだ契約は、一か年であったらしいが、それを延期しなかったのは、彼が、この辞職勧告書事件以来、学館教育にいや気がさして来たからであろう。

また、明治二十七年は、東洋の風雲急を告げ、七月の豊島沖海戦及び牙山の戦闘から、ついに八月一日の宣戦布告となって日清戦争が始まった。若い独歩は、この緊迫した情勢に、田舎にくすぶっていることがたまらなくなって、帰心矢の如く東京へ出てしまったのであろう。

明治二十七年一月発行の『鶴谷叢誌』第十六号に、鶴谷学館の二十六年十月から二十七年七月までの、経費の収支計算表が載っている。

収入部

一金 二九八円　　毛利家御寄附金
一金 一三二円八二銭八厘　　各有志者ヨリ寄贈
一金 三四三七銭五厘　　銀行株式利足
一金 一八四二八銭　　生徒授業料
一金 九円七〇銭　　生徒書籍代戻入
合計 一金四六一円七九銭六厘

（注）この合計高に誤差あるも原文のままとした。

支拂部

一金 二八〇円　　教員給料
一金 二二円五〇銭　　同 旅費
一金 八三円五四銭一厘　　銀行株式買入高
一金 四〇円六二銭一厘　　銀行へ預ケ金
一金 五円　　借家料
一金 五円四八銭二厘　　炭油紙其他諸雑費
一金 七三銭五厘　　書籍運賃取替
一金 二三円九一銭七厘　　残金
合計 一金四六一円七九銭六厘

この収支計算は、ちょうど独歩が佐伯に在住していた間のものである。この教員給料をみると、独歩が月給二十五円であったから、予算の大部分は独歩の俸給で、外の二人の教員は手当程度のわずかなものであった。これは二人とも他に職があって兼任であったのであろうが、若輩の独歩が一人高給とりであったのに対して、不平不満があり、独歩に反感をいだいていたことも事実であろう。特に中島鑑一郎は、当時五十八才で、気むずかしい漢学者であり、大の耶蘇ぎらいであった。学館の生徒の中には、富永徳磨・山口行一・高橋平吉・同 庸吉など、独歩を尊敬し信頼するものもいたが、藤田建次郎・石丸敏一らの如き反対党もいて、これらが排斥運動を企てたのである。その背後には中島の勢力があったことは疑いをいれない。

こうして独歩は、排斥を食って、わずかの間佐伯に居住して、早々に立ち去ってしまったが、彼の随筆『独語』第二部の序文には、次のようにしるしてある。

これ彼が田舎教師として約一年間、豊後国佐伯町に滞在せし時の日記なり。則ち二十六年九月三十日より二十七年八月一日に至るまで、人の子を教へつゝも常に自ら学ぶ処あり。苦しみつゝ問えつゝ又自然の特殊なる恩寵を得て限りなき慰藉を得たる。彼が今日までの生涯に於て尤も幸福なりし時の日記なり。云々

これでもわかるように、独歩は、彼の一生の中で最も精神生活が充実し、多少の紛糾はあったとしても、素朴な人情に浸り、美しい自然に親しみ、ワーズワスの詩情の中に溶けこんだのは佐伯である。数々の詩想を提供し

て、あまたの名作を生むことの出来たのも佐伯である。あと味の悪い憶い出を幾分残したかも知れないが、独歩と佐伯とは、断つことの出来ない深いえにしがあったのである。

（おわり）

研究

大賀宗九

―博多幻住庵を訪ねて―

在福岡市
会員 佐藤賢一

さる九月五日、私は福岡市博多区御供所町の聖福寺を訪れた。それは聖福寺山内の幻住庵に、大賀宗九・宗伯（または宗白）父子の墓があるからであった。

安国山聖福寺は、わが国禅宗（臨済宗）の始祖栄西禅師が宋から帰朝した後、建久六年（一一九五）六月、鎌倉の将軍源頼朝を大檀越として建立した寺である。また幻住庵は天目山と号し、聖福寺の塔頭として、延元年間（一三三六―一三三九）に現在の東区馬出に創建され、正保三年（一六四六）聖福寺山内に移建された寺庵という。聖福寺の護聖院（開山堂）前を塀に沿うて行くと塔頭の一つ西光寺があり、西門に出るが、その道の突きあたりが幻住庵である。

私はその日の午さがり、静かな聖福寺の山内を歩いた。もちろん幻住庵の所在を求めてだが、聞く人もないままに、足にまかせて山内を一周し、ようやく幻住庵に行きついた。人気のない境内、大賀宗九・宗伯墓所の案内標板が、白く秋の日に映えている。

これまで私たちは大賀宗九の名を知ってはいたが、その人物については「大分県偉人伝」所載以上のことは知らなかった。ただ郷土史家故高司正直氏（第八代佐伯所長）が、親交のあった故大賀善之進氏（宗九の子孫）らによって、昭和四年六月二十日、幻住庵で修された大賀宗九三百年祭に参列された後、執筆した史譯「大神大学頭宗九伝」を読んで、いささか宗九の生涯について知ることができた。

しかし、これはあくまで史譯であり、骨子は大賀善之進家の伝承によるもの、史実とはいえない点が多いようである。

黒田藩政下における博多商人三傑といえば、普通島井宗室、神屋宗湛、大賀宗伯の三人をあげるが、大賀氏では宗伯より宗九をあげるのが至当であろう。宗室、宗湛に伍して二十余年、海外貿易によって財をなしたのは父の宗九で、宗伯はそのあとを承けて、中大賀、下大賀といわれる博多新人格式の首位、両大賀の基礎をつくった人物である。

（注）島井宗室　博多の人、通称は徳太夫義豊、父を次郎右衛門貴久といい、家は代々酒屋と土倉を営み、父祖以来対明貿易を行なった博多の富商。茶道を通じて太閤秀吉に近づき、その豪胆ぶりで秀吉に一目をおかしていた。

神屋宗湛、本名は神屋善四郎貞清といい、博多の大貿易商神屋家に生れた。父の名は紹策、祖父は石見銀山を拓いたという神屋寿貞である。

さて大賀宗九は佐伯惟治の子と伝えられる。この惟治は佐伯惟治の滅亡後、梅年礼城主を称した佐伯三郎惟稼（佐伯氏十一代惟常の兄）の子で、祖父太郎左衛門惟信と同名である。宗九は惟信の長子で永禄四年（一五六一）の生れ、